

令和 6 年 9 月 19 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K02741

研究課題名（和文）ICTを活用した海外の大学生と国内学生によるグループ学習の教育効果に関する研究

研究課題名（英文）Research on educational effectiveness of group learning for international students and domestic students using ICT

研究代表者

永田 浩一（NAGATA, Hirokazu）

信州大学・学術研究院総合人間科学系・准教授

研究者番号：20507438

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：COVID19の影響により2020年以降すべての海外研修が中止となったが、COILを実施する大学が急増した。本研究におけるCOILや国際共修は、主に初年次学生を対象とし、COILの教育的効果やキャリア形成への影響を解明した。また、COILと国際共修の教育的効果を比較することでそれぞれのメリット、デメリットについても注目した。

COILや国際共修が、キャリア形成やグローバル人材としての素養を涵養することに影響を与えることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

COILと国際共修の教育的効果について、留学生が履修していない国内学生のみでグループ学習を実施する対面学習と比較検証したことにより、COILと国際共修の特長を明らかにすることができた。従来、COILや国際共修の研究においては、特定の理論に基づき仮説を立てた検証や分析には至らず、実践報告に止まるものが散見されたが、本研究では、越境学習の理論を用いたり、グローバル組織社会化との関連について示唆したりすることで教育的効果に関する研究を前進させた。

研究成果の概要（英文）：During the pandemic in 2020, student mobility had temporarily stopped, while intercultural collaborative learning, especially COIL using Information and Communication Technology was implemented as a substitute for global education. Specifically, our COIL and intercultural collaborative learning were mainly designed for freshman university students for the development of global human resources. For this purpose, we divided the sample into the COIL group and the intercultural collaborative learning group, and compared the outcomes of both groups. According to the questionnaires, the differences in the average scores between the COIL group and the intercultural collaborative learning group were statistically significant in some questions. Based on the free descriptive answers of the questionnaires, which included the advantages and disadvantages of using COIL, it was suggested that the students' career formation and global competency were cultivated.

研究分野：教育学

キーワード：グローバル人材育成

1. 研究開始当初の背景

大学は産業界の影響を受けながらも、各大学の教育理念に基づきグローバルな環境で活躍できる人材(以下、グローバル人材)像を掲げ、グローバル教育に取り組んでいる。その契機となったのは、大学のグローバル化を加速させることを目的とし、長期的で大規模な予算が付与された競争的資金であるスーパーグローバル大学創成支援事業(2014年)である。そこから、大学では講義科目だけでなく、海外研修プログラムや海外留学プログラムを開発し、語学力やコミュニケーション能力向上のための教育を実践してきた。特に、国内キャンパスで留学生と国内学生がグループ(対面)で課題に取り組む国際共修の取り組み事例が増加していた。しかし、COVID19の影響により2020年3月以降すべての海外研修プログラムや海外留学プログラムが中止となり、海外から留学生が渡日できず国際共修の実施も困難となった。そこで、ICTを活用して海外にいる大学生と国内学生がグループ(非対面)で課題に取り組む Collaborative Online International Learning(以下、COIL)を実施する大学が急激に増加した。近年、世界中でCOILが試行され、黎明期である現在では、ICTに関連する技術的な課題抽出に焦点が当てられている。しかし、学生の成長メカニズムや教育設計、教育的効果の測定手法について特定の理論に基づき仮説を立てた検証・分析には至らず、実践報告に止まるものが散見される。

2. 研究の目的

本研究では、COILや国際共修を通じた知識の獲得や認知の変容、その後の学生のキャリア形成への影響や行動変容についてアンケート調査結果を分析することで解明する。

COILと国際共修の教育的効果を検証し、その特長やメリット、デメリットを挙げながら効果的に活用する教育的手法について考察し、留学生が履修していない国内学生のみでグループ学習を実施した対面授業とも比較検証する。また、単年度における一つのプロジェクトや授業を対象とした研究ではなく、複数年度に渡る、複数のプロジェクトや授業について分析する。また、主に初年次大学生を対象にグローバル人材育成を目的とした後述する越境学習の理論的枠組みを用いて授業デザインされたCOILや国際共修であることを検証する。

3. 研究の方法

2020年度から2023年度に実施した海外にいる大学生と国内学生がグループで課題に取り組むCOIL終了後に実施したアンケート結果(12プログラム、アンケート回収数250人以上)を分析した。研究方法としては、アンケートの自由記述といった質的データとアンケートの選択肢回答による量的データより、両者を相互的に補完し組み合わせる混合研究法を用いた。

アンケートは20項目(表1)から構成され、COILや国際共修の開始前の状態が3だとし、終了後に良い方向に変化すれば5を、悪い方向に変化すれば1を、変化がなければ3を選択するように、5段階評定で回答を求めた。COILや国際共修ならではのメリット、デメリット、身についたこと等について回答する自由記述を実施した。その質問項目の一つとして、将来、グローバルな環境で働く想定した場合、今回のCOILや国際共修で何を学んだのかについて記載させた。

表1 アンケート項目

Q1: 物事を柔軟に考えて行動できたか	Q11: 自分の感情をコントロールできたか
Q2: オープンな気持ちで取り組めたか	Q12: 不確実なことに対する忍耐力はついたか
Q3: チームワークを意識して進められたか	Q13: うまく行かなかったとき、立ち直ることができたか
Q4: 好奇心を持って試行錯誤できたか	Q14: 物事を多面的に考えられるようになったか
Q5: 物事を観察する能力は伸びたか	Q15: 物事を肯定的に捉えられるようになったか
Q6: 情報収集能力は伸びたか	Q16: 自分が成長し、やればできるという意識を持てたか
Q7: 課題達成に向けて、1つ1つのタスクを発見する力は伸びたか	Q17: 同じグループの留学生・海外大学生の出身国の文化に対する理解は深まったか
Q8: 課題達成に向けて、1つ1つのタスクを解決する力は伸びたか	Q18: 自分と異なる文化を尊重する態度、違いを楽しむ気持ちは身についたか
Q9: 創造的なことができたと思うか	Q19: 異文化コミュニケーション能力は向上したか(語学力、交渉力、傾聴力等)
Q10: ユーモアを持って取り組めたか	Q20: これからも異文化交流を続けていきたいか

4. 研究成果

【COILと国際共修の教育的効果の比較】

COILの教育的効果の特長として、物事を柔軟に、多面的に考え、情報収集能力や観察する

能力が伸びることにより、課題を解決する力を涵養し、異なる文化を理解し尊重できるようになることが示唆された。オンライン上で個人だけでもできる調査や情報を収集するスキルが身についただけでなく、異質なことを受け入れるという意識変容に影響を与えた可能性がある。

一方、国際共修の教育的効果の特長は、対面でのしっかりとしたコミュニケーションを図った結果として、創造性に富んだ方法で課題に取り組めるようになったことが示唆された。また、コミュニケーションを円滑にさせるためにはユーモアが必要であると認識し、異文化交流を更に続けていきたいという意欲が生まれた。対面による双方向のコミュニケーションにより、相手から刺激を受けて生じる事象も多く具体的に様々なことを実感できたので、COILと比較すると学生間の関係性が深まっていったのかもしれない。

【COILならではのメリット・デメリット（学生のコメントより）】

（COILならではのメリット）

体調を崩すことがなかった。衣食住に対する不安がなかった。自分が落ち着ける環境下で緊張せず、リラックスできる状況で学習できた。一か所に集まる必要がなく、時間調整がしやすかったというオンラインならではの利便性を実感できた。ひいては、海外留学の準備教育としての役割も果たしたようだ。

（COILならではのデメリット）

授業外での食事や散策をする機会がなく、味覚や文化の違いをより身近に感じる事ができなかった。また、緊張感を感じられない。といった五感に関することや臨場感の高まりに関するコメントが見受けられた。

【COILや国際共修の経験が、将来の自分にどのような影響を与えたか】

課題以外のことや課題に取り組む時間以外における雑談の重要性を理解していることに注目したい。COILや国際共修では、授業デザインの工夫次第で、授業時間以外で協働する機会を多く設定でき、課題とは関係のない話題でのコミュニケーションを取る機会が生じるため、それが、海外大学生との関係性を深めることに影響を与えることに気づいた学生がいた。キャリア形成への影響については、将来、企業や大学といった研究機関で働くことを希望している学生にとって、将来の自分をイメージできたようだ。その他も、教員や医師となった際の自分をイメージできている学生もいた。学生からのコメントの中に、*価値観の違いに前向きになった。視野が広がった、違う環境に挑戦していきたい。*という記述があり、自己変容を伺い知ることができたようだ。つまり、現状の自分を理解しているからこそ、自己変容の重要性に気づき、変化したいという意欲が生じたと思われる。

そこで、キャリア形成への影響について、二つのライフの視点より考察してみると、Daily Lifeについては、COILに自ら希望して参加していることから、目標を達成する（将来、グローバルな環境で活躍する）ために、現在しっかり行動を起こしている。また、Future Lifeについては、本研究において学生に将来の見通しをイメージさせる質問を設定し、学生に自らを内省させることで目標を明確化させている。つまり、COILや国際共修を体験させることにより、グローバルな環境をイメージできるようにさせている。

【越境学習としてのCOIL】

Zoomなどを使用してオンライン上で常識やバックグラウンドの異なる海外大学生と協働し、普段とは異なる意識で学習を進め、研修後はプライベートな空間でリラックスするといった記述があり、異なる状況を往還している意識もあったようだ。文化や習慣、考え方の異なる者と協働し、普段よりも自分の意見を明確に、はっきり伝えなければならないという状況であったことから越境学習が成立していたことが伺える。

【グローバル組織社会化、高次学習、組織学習】

COILや国際共修といった教育プログラムとグローバル人材としてのキャリア形成に重要とされるグローバル組織社会化^(注1)との関係性について考えてみたい。COILは海外拠点や多国籍人材と遠隔オンライン会議をする環境に類似している。国際共修はグローバル化された企業内(上司や同僚に多国籍人材がいる)と類似した環境であると言える。つまり、COILや国際共修の教育的効果として、グローバル組織社会化を促進するための素養を大学生時代に涵養できる可能性があると思われる。

COILや国際共修経験による発見や創造的な活動に関する学生のコメントより、新たな発見があり、斬新な企画やアイデアを創出し、俯瞰的に日本をみることが出来たことからCOILや国際共修は、情報創出型の学習であったことが伺える。つまり、高次学習^(注2)が行われていたことが推察される。将来、企業という組織で働く際に経験する組織学習^(注3)を体験させる機会を与えていることも示唆された。

【今後に向けて】

真にグローバルに活躍できる人材としての素養を涵養できたのかは、大学生が企業に入社して数年後にどのような人材になっているのか確認しなければならない。また、アンケートを用いているため大学生の主観に基づいて分析しており、ピア評価や教員の評価も含めた総合的な評価手法の確立を目指さなければならない。更に、具体的にはいつ、どのような

メカニズムで教育的効果が発現したのかについての詳細な分析が必要であろう。

〔注〕

「グローバル組織社会化¹⁾」対面コミュニケーションや ICT を活用した遠隔コミュニケーションも含めた国内外のグローバルな環境で、所属する企業内に適応していくプロセスである。大学を卒業し、日本国内の企業に勤務するのであれば、まずは組織に適応していく組織社会化のプロセスを経る。その後、日本国内で社内の多国籍人材と協働することや遠隔会議システムを使用して海外にいる多国籍人材と協働することがあり、グローバルな環境における組織の文化や仕事の領域について学び、業務に邁進しながらグローバルな職場環境に順応していくこと（永田 2022）。

「高次学習²⁾」規範や枠組みの変革を通じて物事の因果関係や新たな行動についての新たな理解を構築する学習（安藤 2019）。

「組織学習³⁾」組織と個人を包含するシステム全体における組織ルーティーンの変化、組織の一員として、組織目標を共有する個人が、組織のために行う学習活動（安藤 2019）。

〔参考文献〕

- 安藤史江（2019）『コア・テキスト組織学習』新世社
- 永田浩一（2022）『日本企業のグローバル人材育成に貢献する大学教育ドメイン』中部大学 2021 年度博士論文

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 永田浩一, 仙石祐	4. 巻 25
2. 論文標題 COIL (Collaborative Online International Learning)と国際共修の教育的効果の比較-越境学習理論に基づきキャリア形成を意識して設計された教育プログラムの結果より-	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 グローバル教育	6. 最初と最後の頁 39-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永田浩一, 仙石祐, 櫻村真由, 寺澤朝子	4. 巻 4
2. 論文標題 グローバルエンジニア育成を目的とした海外インターンシップの長期的効果の検証	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 工学教育	6. 最初と最後の頁 19-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永田浩一	4. 巻 1
2. 論文標題 日本企業のグローバル人材育成に貢献する大学教育ドメイン	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 博士論文 (中部大学)	6. 最初と最後の頁 1-130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 永田浩一, 仙石祐
2. 発表標題 ICTを活用した国際共修が学生のキャリア形成に及ぼす影響
3. 学会等名 第29回日本グローバル教育学会全国研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 永田浩一, 仙石祐
2. 発表標題 ICTを活用したオンライン海外研修の教育効果について
3. 学会等名 第28回日本グローバル教育学会全国研究大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	寺澤 朝子 (TERAZAWA Asako) (40273247)	中部大学・経営情報学部・教授 (33910)	
研究分担者	仙石 祐 (SENGOKU Yu) (90829160)	信州大学・学術研究院総合人間科学系・講師 (13601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
マレーシア	マレーシアプトラ大学			
ロシア連邦	ノヴォシビルスク大学			
中国	江蘇理工学院	高雄科技大学	輔仁大学	